

ゴシック的「題材」から「主体」へ

—*Love Medicine* に見られる Native American 文学の展望—*

平野 真理子

序論

1960～70年代にかけてアメリカ文学は Native American Renaissance と称される時期を迎え、それ以降 Indian 作家の活躍は目覚ましい。他者によって語られてきた部族の歴史、伝統、文化などが、今日彼ら自身のペンを通して、他者である我々読者に語りかけられている。彼らが白人中心のアメリカ文学史において「語る存在」となり声を発する以前は、忘れ去られ、周縁に追いやられ、語られる存在、つまり文学的題材という立場に位置づけられてきた。アメリカン・ゴシックにおいて Indian は格好の題材であり、従来のアメリカ人作家たちは読者の好奇心を満足させるために、物語に都合の良い “Indian” 像を作り出してきたのである。

そこで本論では、Chippewa 族の作家として今日活躍する Louise Erdrich の *Love Medicine* を取り上げ、これまで文学的「題材」として声を奪われてきた Indian が「語る」主体となった今、アメリカン・ゴシックと彼らの関係について今日の視点から考察してみたい。

時代背景

まず最初に、アメリカン・ゴシックが誕生した時期と Indian とはどのような関係にあったのだろうか。アメリカが文学的題材を模索していた19世紀初頭、イギリスではゴシック・ロマンスが流行し、人気を博していた。建国当初から「白日」のもと、現実そのものに目を向けていたアメリカにとってロマンスの要素が欠如していたことは想像に難くない。*Frontier Gothic* の冒頭で David Mogen はアメリカン・ゴシックについて次のように論じている。「ある意味でアメリカン・ゴシッ

クという、まさしくその概念が矛盾している。なぜなら多くのアメリカ文化がゴシックの経験の可能性を否定しているからだ。」同様に Charles L. Crow もアメリカのゴシック的要素の欠落を、より具体的に以下のように挙げている。

To the eyes of many writers and artists in early America, there was a paucity of material. Even the landscape seemed empty and raw. There were indeed plenty of trees, and wilderness vistas suitable for evoking a version of the sublime, as painters of the Hudson River school (Thomas Cole and his followers) demonstrated. However, there was a distressing lack of ruins, either for Gothic effects or for gentle, reflective melancholy. There was no Tintern Abbey to be viewed by moonlight; nor were there at first any country churchyards or deserted villages, ... There seemed, to eyes trained in Europe, a lack of history in America.¹

そして実際、アメリカ人作家たちは自国の文学的材料の乏しさを嘆いたが、アメリカ文学は、自らの作品が最も効果的になるよう、作家個人が輸入された従来のゴシックを時間をかけ、いわゆる「アメリカ版」に変形させていったと言える。ここで、アメリカにしかない題材、アメリカの独自性を打ち出せるテーマとして彼らが目を向けたのが Indian だった。白人の目の前に出沒し、彼らを恐怖に陥れる存在として Indian は当時イギリスで流行っていたゴシック・ロマンスに登場する ‘demon’ や ‘ghost’ の役割を果たすこととなる。Donald Ringe は著書、*American Gothic* の中で、

この状況を次のようにうまく解説している。「荒野の中で、どこからともなく、雄叫びの声をあげ、斧をふりかざし白人を殺戮する Indian の姿に読者は戦慄を覚え、同時にその恐怖を満喫するのだ。」Indian が悪魔や幽霊にとって代わるものとして描かれたことを考えれば、彼らは当然、生身の人間としては扱われておらず、個々の作品の目的を達するための便利な道具として用いられたに過ぎないと言っても過言ではない。しかし Teresa Goddu は彼らの重要性について次のように指摘している。

The gothicized Indian provided the nation with a distinctive literary asset as well as a politically useful cultural image. Though America did not have crumbling castles and antiquated traditions, it did have in the Indian a symbol of a ruined and conquered past. ... By providing the materials for a past that assured the nation an exceptional literature as well as a progressive future, the Indian simultaneously enabled America's literary flowering and its consolidation of a national identity.²

このように、国家に対して多大なる貢献を果たした Indian ではあるが、アメリカン・ゴシックにおいて彼らが担った'demon'や'ghost'としての役割が意味するのは皮肉なことに、彼らがアメリカの風景から消滅することが避けられない運命であり、ひいては、「白人の侵略行為を結果として正当化するゴシック的シンボルを通して Indian は悪魔化された」と言えるのである。

また、当時の白人にとって Indian は、すぐに感傷的で崇高なものの根元となった。国家は郷愁にふけるように彼らの消失に涙する一方で、彼らの消滅の証となる墓を見ては心を躍らせている、と指摘されるが、これは言い換えれば白人たちには Indian の消滅という避けられない運命が保証され、manifest destiny という大義名分を盾に

Indian の運命を安全地帯から傍観できるからこそ、滅びゆく Indian に偽りの同情を示すことが出来たことに他ならない。実際、国家拡大の戦略のもと、Indian は分散され、縮小され、衰退の一途を辿ることになったのである。しかしそのような運命の中で今日、作家としての立場から活躍する彼らはアメリカ文学において以前とは異なる関係を築きつつある。

Love Medicine: 「題材」から「主体」へ

ここで、Louise Erdrich の *Love Medicine* を取り上げ、作品と従来のゴシック的 Indian 像との関係を考察してみたい。Chippewa 族の父とドイツ系の母を両親にもつ Erdrich は自身も North Dakota Turtle Mountain Chippewa の部族の一員として執筆活動を行っている。この作品は 1984 年に発表され、93 年に改訂版が発表されているが、本論では改訂版を採用することとする。North Dakota 州の架空の保留地を舞台に、June が雪の中で命を落とすシーンから物語は始まる。

Even when it started to snow she did not lose her sense of direction. Her feet grew numb, but she did not worry about the distance. The heavy winds couldn't blow her off course. She continued. Even when her heart clenched and her skin turned crackling cold it didn't matter, because the pure and naked part of her went on.

The snow fell deeper that Easter than it had in forty years, but June walked over it like water and came home.³

そしてこの後、保留地に住む彼女の一族が、June の死にいわば憑りつかれる形で物語が展開してゆく。June の夫である Gordie は June の生前、彼女を愛しているながらも虐待し、ついに彼女に去られてしまうのだが、彼女の死を知り、精神的なダメージを受ける。彼女の死後、酒を飲み始め

「June を恋しく思い、かつ、彼女がいないことに安堵していた」という自家撞着に陥りながらも、彼女と暮らした家で思い出とともに一人で暮らしている。Indian の昔からの風習で、死者の名前を決して口に出してはいけない、ということを知っていたにもかかわらず、苦しみあまり Gordie は、ある晩 “June” と大声で叫んでしまう。すると June はそれに返答するかのように鏡の中から現れる。

There were no curtains in the bathroom, and something made him look at the window.

Her face. June's face was there. Wild and pale with a bloody mouth. She raised her hand, thin bones, and scratched sadly on the glass. When he ran from the bathroom she got angry and began to pound. The glass shattered. He heard it falling like music to the bathroom floor. Everything was on, even the oven. He stood in the humming light of the refrigerator, believing the cold radiance would protect him. Nothing could stop her though. There was nothing he could do, and then he did the wrong thing. He plugged the toaster into the wall.

There was a loud crack. Darkness. A ball of red light fell in his hands. Everything went utterly silent, and she squeezed through the window in that instant.⁴

ここで Erdrich は June を登場させるにあたり、まさにゴシック的手法を用いている。木々や湖のざわめきという「自然」に恐怖を感じる Gordie が、冷蔵庫やオープンといった「テクノロジー」を武器に防御を試みるも、June という「超自然」な存在に屈するという構図を読み取ることができる。Gordie は家中を逃げ回り、追いかけてくる June から一刻も早く逃れるため、車に飛び乗り町へ向かう。しかし道中で一頭のメス鹿を轢いてしまう。鹿の皮を売れば、酒が買えるという安易

な考えで彼は鹿を後部座席に乗せ、車を走らせる。恐怖で震える手で運転するうち、背後から視線を感じる彼がバックミラーを覗くと、死んだと思っていた鹿は実は気絶しただけであり、彼をじっと覗きこんでいた。ここで Gordie はタイヤレバーを取り出し、鹿をめった打ちに殴り殺してしまう。そしてやっと彼の震えは止まり、突然の静寂が現れるのであるが、彼はこの瞬間に「June を殺してしまった」と、はっとするのである。自らの犯した罪を修道院で告白し、警察に連行された彼は再び両親のいる家に戻った時、消毒薬を飲み、自ら命を絶つ。

Gordie の一連のこのような帰郷は冒頭で触れた June の帰郷と対極をなしており、June の生命力の強さを読者に再確認させ、彼女の帰郷を引き立たせている。また、June は別の形で息子である Lipsha の前に ‘ghost’ となって出没する。Lipsha は両親が誰なのかを知らずに祖父母に育てられ、母親に対しては情け容赦のない拒否反応を示していた。しかし母親が June であることを知った彼は「そう、人生のこととなると、ボクはずっと世間知らずだった。単純なままだったんだ。でも、もうこれ以上、そうはしてられない。」と自分と向き合うまでになる。異父兄弟である King と Gerry とのトランプゲームの賭けに勝った Lipsha は賞金である車、Firebird を手に入れ、これを運転して故郷に向かう。この Firebird は June の保険金で King が購入したものであり、いわば June の化身と言える。Lipsha が June と共に故郷の保留地に向かう姿を Shelby Grantham は次のように表現している。

All the grieving and drinking and lusting and dying, the loving and torturing and birthing and joking, the working and musing and wising-up packed into this magnificent chronicle culminate in Lipsha's realization that “there was good” in his life...⁵

これまで根無し草であった Lipsha が Nanapush 家の人間としての誇りを持ち、トリックスターとしての自覚と共に自分の居場所を見出すまでになる。

Erdrich は、暗闇の中から姿を現し、人を恐怖に陥れたり、ある特定の人に憑りつく、という従来のゴシック的 ‘ghost’ の役割を、ユーモアあふれる視点から巧みに利用することにより、逆に存在を否定され続けてきた人間の生身の姿を描き出していると言える。Shelly Stigter は論文、“Two World Views”の中で W. E. DuBois の論じる二重意識、つまり ‘double consciousness’ に言及し、黒人は絶えず他者の目を通してのみ自己を認識する、という見解を Indian 作家にもあてはめている。つまり、Indian 作家には二つのものの見方がある。一つは支配されたものとして自分自身によるものの見方、もう一つは支配する側である欧米の人間が彼らをどのように認識しているか、という他者の目を通してより大きな文化への参加者としての自分自身を認識する、という見方である。しかし Stinger は、Indian は黒人とは違い、現代 Indian 作家は ‘bicultural’、つまり白人中心の ‘dominant culture’ と ‘native culture’ の両方に精通している点で有利であり、どちらの文化からも文学的、芸術的技術を自由に駆使し、その状況は同じマイノリティーでありながら DuBois の ‘double consciousness’ とは逆の状況にある、と論じている。二つの文化の板挟みではなく、二つの文化によりもたらされた現在に目を向ける Erdrich の姿勢を Albetine の前に現れる June の姿から読み取ってみたい。

All of a piece. As if the sky were a pattern of nerves and our thought and memories traveled across it. As if the sky were one gigantic memory for us all. Or a dance hall. And all the world’s wandering souls were dancing there. I thought of June. She would be dancing if there was a dance hall in a space. She would be

dancing a two- step for wandering souls. Her long legs lifting and falling. Her laugh an ace. Her sweet perfume the way all grown-up women were supposed to smell. Her amusement at both the bad and the good. Her defeat. Her reckless victory. Her sons.⁶

「現代の Indian 作家は、多大なる損失を被ったことを視野に入れて、不運の結果、残された文化の神髄を守り、祝福しながら今日生き残った者の物語を語らねばならない」と感じる Erdrich の作家としての使命感はこの場面に現れていると言える。Indian の世界では通常、死後の世界へ移ることに対する個人の姿勢は、その人間が自己の運命をどのように受け入れるかによって決定され、多くの Indian は人間は社会的な地位やさまざまな外的状況によって死後、多様な居住場所を割り当てられると考えている。ここで、Albetine はすべての彷徨える魂が調和をなして同じ舞台上で踊る姿を目にしている。死者の魂の中で香水の香りを纏った、今にも目の前に現れそうなりアルなイメージと共に、June はすべての魂を祝福し自己を受け入れ、未来へ目を向ける。これは「過去とどう向き合うかによって現在が生まれ、未来へとつながっていく」という Erdrich の歴史観と重なりあっていると見えよう。

結論

今日いまだに Indian 文学は安住の地を見いだせず文学史の中で漂流していると言えるが、Lucy Maddox は 91 年に著書、*Removals* でその現状を「現代の批評は文学的言説の脱神話化と批評的言説の政治化を強調しながらも、こと Indian を扱う段になると、本質的には 19 世紀の批評を今もそっくり繰り返しているに過ぎない」と嘆き、白人と Indian という両者の物語の収束を目指すことが適切なのか、そもそもこのような収束が果たして可能なのか、という根元的な問いを投げかけている。そして今日においてもやはり、多くの

Indian が部族に関する豊富な知識を持ち合わせているにもかかわらず、大学教育を受けていないという理由でアカデミックな世界では権威ある存在とは認められず、Devon Mihesuah が指摘するように Indian を軽視する学者が多すぎるのが現状である。Eva Marie Garrouette はこの事態に対して、‘radical indigenism’という視点から新しい展望を示している。‘radical indigenism’が目指すのは、先住民の知識の単なる「保存」ではなく、Indian 自身、Indian 学者、白人学者、といったそれぞれの立場からの多岐にわたる事象や貢献を融合させる中で、Indian 古来の人生観、世界観を維持し、拡大することである。この考えにおいては、たとえ古来からの特有の伝統が失われたとしても、彼らは形を変えた文化の中に再び住むことが出来る。そして再び住むことになるその文化は、彼らが単に守り、実践し、保存する、というのではなく、その文化の中にうまく適応して居住するという、以前とは違う文化である。その意味で彼らの文化を取り戻すということは、以前とは異なる生活を送ることを意味し、それこそが‘radical indigenism’の究極の目的と言える。

また、Donald Fixico が指摘するように、今日 non-Indian が Indian の歴史について書くことが多いが、他者に自分たちのことが書かれるということは、Indian がどのように駆逐され、不当な扱いを受けてきたのかを示す、新たな一例となりうる。同様に、カリフォルニア大学の教授でもあり、「四大アメリカ先住民作家」の一人とされる Gerald Vizenor は「かつて蔑まれた部族であると同時に風変わりなよそ者」と捉えられてきた Indian を ‘Indianness’ という言葉で表現する中で、もし彼らの物語が従来の文学研究者によって翻訳され、文書化されてしまうと、Indian の時間、空間、意識が誤って解釈され、部族の持つ明白な記憶や物語を示すよりも ‘Indianness’ に寄与することになる、と警鐘を鳴らし、Indian 自身の声を聞く重要性を説いている。

安住の地を模索中である Indian 文学において

Erdich の作品は「non-Indian の読者は不利な部外者にされてしまう、その状況はアメリカの主流社会において Indian が置かれている状況の逆転の現象である」と評されるほど、Indian のスタイルに不慣れな読者に躊躇することなく独自のスタイルを貫いている。

従来 Indian は、白人中心のアカデミックな世界では消され、除外され、隠された存在だったが、Erdich は光が当たらなかったその部分に真正面から向き合い、彼らの雄大で深遠なる世界を愛情を持って描き出している。ゴシックとは ‘invisible’ なものを ‘visible’なものにする役割を果たしている、と Crow が論じているように、これまでゴシックに題材を提供してきた Indian は今日語りの主体となり、その中心的役割を果たすことで、従来のアメリカ文学にとって不都合なものを覆い隠してきたパールを取り払いつつある、と言えるのではないだろうか。

*本稿は、2010年3月26日の英語圏文化研究会第6回大会シンポジウムにおける口頭発表を加筆修正したものである。

注

- 1 Crow, Charles L. *American Gothic*. Cardiff: U of Wales P, 2009. 10.
- 2 Goddu, Teresa A. *Gothic America: Narrative, History, and Nation*. New York: Columbia UP, 1997. 55.
- 3 Erdich, Louise. *Love Medicine*. New York: HarperPerennial, 1993. 7.
- 4 Erdich 217-218.
- 5 Chavkin, Allan, and Nancy Feyl Chavkin, eds. *Conversations with Louise Erdich and Michael Dorris*. Jackson: UP of Mississippi, 1994. 16.
- 6 Erdich 37.

参考文献

- Beidler, Peter G., and Gay Barton, eds. *A reader's guide to the novels of Louise Erdrich*. Rev. and expanded ed. Columbia: U of Missouri P, 2006.
- DuBois, W. E. B. *The Souls of Black Folk*. New York: Oxford UP, 2008.
- Garroutte, Eva Marie. *Real Indians: Identity and the Survival of Native America*. Berkeley: U of California P, 2003.
- Gross, Louis S. *Redefining the American Gothic: From Wieland to Day of the Dead*. Ann Arbor: UMI Research P, 1989.
- Hultkrantz, Åke. trans. Mogica Setterwell. *The Religions of the American Indians*. Berkeley: U of California P, 1980.
- Maddox, Lucy. *Removals: Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs*. New York: Oxford UP, 1991.
- Mihesuah, Devon A, ed. *Natives and Academics: Researching and Writing about American Indians*. Lincoln: U of Nebraska P, 1998.
- Mogen, David, Scott P. Sanders and Joanne B. Karpinski, eds. *Frontier Gothic: Terror and Wonder at the Frontier in American Literature*. London: Associated UP, 1993.
- Ringe, Donald A., *American Gothic: Imagination and Reason in Nineteenth-Century Fiction*. Lexington: UP of Kentucky, 1982.
- Stigter, Shelley. *Two World Views: Double-Voice and Double-Consciousness in Native American Literature*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller, 2008.
- Vizenor, Gerald. *Native American Literature: A Brief Introduction and Anthology*. New York: Longman, 1995.
- Wong, Hertha D. Sweet, ed. *Louise Erdrich's Love Medicine: A Casebook*. New York: Oxford UP, 2000.